

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 2013 年 6 月 1 日現在

機関番号：32686

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010 ～ 2012

課題番号：22520112

研究課題名（和文） 古代末期の信仰集団をめぐる美術研究—オスティア・アンティカ遺跡を中心に

研究課題名（英文） Studies of Artistic Environments for the Worship in Late Antiquity at Ostia Antica

研究代表者

加藤 磨珠枝 (KATO MASUE)

立教大学・文学部・准教授

研究者番号：40422521

研究成果の概要（和文）：初期キリスト教美術中心主義で論じられてきた古代末期の諸宗教（ユダヤ教、ローマ伝統宗教、ミトラ教など）の作品解釈について、ローマの外港オスティア・アンティカ遺構群の詳細な現地調査と分析から得られた知見を用いて、それらの発展をいかに理解しうるのかについて、新たな可能性を提示した。2 世紀末から 3 世紀末の間に、オスティアの諸宗教の美術は都市環境の変化とともに、その内的意味をも変化させ、市民の宗教から各共同体のものへと、当時の人々の信仰のあり方と密接に結びついて変遷したことが明らかにされた。

研究成果の概要（英文）：The research focused on the religious art in late antiquity in the city of Ostia Antica, based on analysis of related archaeological evidences and investigation of the visual materials of Judaism, Mithraism, Christianity and other gods. A special attention was paid to the question how the visual images reflect the profound transformation of new religious life in the city of Roman Empire. As a result of this analysis it has become clear that the image of god, the role of interior decoration, and all moved between the end of second century and the end of third in same direction, toward the “symbolic” mode, from civic religion to community religion.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010 年度	900,000	270,000	1,170,000
2011 年度	500,000	150,000	650,000
2012 年度	300,000	90,000	390,000
年度			
年度			
総計	1,700,000	510,000	2,210,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・美学美術史

キーワード：美術史、考古学、宗教史、イタリア

1. 研究開始当初の背景

西洋古代末期において、ローマ帝国の社会

や都市生活は大きく変化し、人々は自分たちの帰属先を信仰集団に求め、そこから独自の視覚芸術を発展させた。その美術の重要性は、後のキリスト教美術の発展を見ても明らかであるが、一方で、当時キリスト教と並び多くの信者を集めたミトラ教は一大勢力であったと考えられるが、密儀という性格とその後の衰退によって、現代では失われた一宗教として、その作品研究も周縁的な扱いを受けている。

キリスト教美術中心主義により他の宗教作品を論ずる従来の動向とは異なる視点で、時代的共通性に注目して作品解釈を行う方法は、20世紀末からエルスナーの研究 (J. Elsner, *Art and the Roman Viewer: The Transformation of Art from the Pagan World to Christianity*, Cambridge University Press, 1995) らによって、古代末期美術の新見地を開いたが、いまだ十全に論じられたとは言いがたい。

このような研究状況を踏まえて、本研究では、古代ローマの外港オスティア・アンティカ遺跡に残る古代末期の宗教建築とその内部装飾に注目し、都市に共存していたローマ伝統宗教、ユダヤ教、ミトラ教、4世紀以降登場する初期キリスト教徒の遺構を研究対象として取り上げた。オスティア遺跡を研究対象とした主な理由は以下の点にある。

(1) 本遺跡がイタリアのポンペイや北アフリカのタムガディ、シリアのドゥラ・エウロポスなどと並び、完全な形で発掘されたローマ都市の遺跡であること。

(2) 帝政期には人口100万をこえた首都ローマへの物資供給の基地であり、地中海全域から多くの人が集まったため、神殿をはじめとする多様な宗教施設の遺構が残り、多くの研究材料を提供していること。

(3) 美術史的にも、ヨーロッパ内最古のユダヤ教シナゴグの遺構や小規模な初期キリスト教徒の室内空間、ミトラ教神殿の内部装飾が都市環境のなかに保存され、当時の姿をしのぶことができる貴重な作例であること。

(4) 初期キリスト教の歴史においても重要な位置を占め、オスティアの司教はローマ司教(教皇)に対して大きな影響力を持っていたこと。

オスティアに関する発掘の成果は1953年以来、継続的に刊行されている *Scavi di Ostia* や、*Notizie degli scavi di antichità* で報告され、また、総合的な研究として、R. Meiggs, *Roman Ostia*, 2nd ed., Oxford

1973; A. D. Zevi, A. Claridge (eds.), *Roman Ostia Revisited*, London 1996 などがある。その他、考古・美術史学の分野では、単独の建築構造と内部装飾に焦点を絞った個別の作品研究が、また歴史学全般では、宗教、工業、組合、社会構造などについての研究が発表されているが、ポンペイに比べるとその数は圧倒的に少ない。日本ではさらにその傾向が強く、とくにオスティアを対象とするものは歴史研究を中心とする10本たらずの雑誌論文に限られ、美術史の成果はほぼ皆無である。

2. 研究の目的

(1) 本研究は、帝都ローマの外港オスティア・アンティカ遺跡に残る古代末期の宗教的遺構を対象として、都市内に共存していたローマ伝統宗教、ユダヤ教、キリスト教、ミトラ教など、多様な信仰集団の美術について考察し、当時の宗教美術の形成、変遷、信仰のあり方を多角的にとらえることを目的とする。

(2) オスティア・アンティカが古代ローマ時代以来、主要港湾都市として、都市ローマはもちろんのこと、他の主要地方都市と密接な関係を有していた点に注目し、他の地域に残る関連作品と比較・検討することで、古代末期の都市生活における宗教美術の果たした役割や実態をより詳細に解明し、従来の研究の再統合を試み、当時の信仰集団をめぐる美術表現について新知見を提案することをめざす。特に、都市ローマはその後の発展ゆえに、当時の遺構は墓地を中心に断片化した状態でのみ残されているが、それらとオスティアを比較することでより豊かな成果を求めめる。

(3) 21世紀の現代において、世界各国の距離は小さくなったといわれるが、それは皮相的な段階にとどまっており、ひとつの社会における多様な信仰集団の共存のあり方を探る試みは重要な課題の一つである。こうした視点から、当時の宗教美術の果たした役割、相互関係を歴史的に解釈し、その成果を現代のグローバルな宗教間の対話をめざす礎とする。

3. 研究の方法

(1) 本研究の特色は、実証的かつ視覚的な情報である建築、絵画、彫刻など、考古学的遺構を用いた分析的手法にある。遺跡に残された信仰の痕跡は、美術館に展示可能な近代以降の作品と異なり、宗教施設の内部空間を

中心とする総合芸術であり、現地に行き行って観るしかないフィールド・ワークを前提とする。当時の信徒は宗教施設とどのように関わり、それは残されたモニュメントからどのように読み取ることができるのか、受容者の視点から徹底した実地調査・研究を行い、それによって得られた画像データを整理し、未刊行の関連作品も含めてデータベース化を進めた。これには現地協力者が必須であり、オスティア・アンティカ考古管理事務所長アンジェロ・ペレグリーニ氏をはじめとするイタリア人研究者との連携を結んだ。

(2) 上記のオスティア・アンティカ遺跡の現地調査に加え、古代末期の他の主要地方都市（ローマおよび近年考古学的発見が相次いでいるイスラエル）の現地調査、および関連作品を所蔵する欧米美術館での調査、さらにはローマの研究機関（Deutsches archäologisches Institut, British School）での文献資料調査を行い、最新の研究成果を有機的に結びつけ、研究テーマの実証的検証に生かした。従来の美術史および考古学分野では、作品研究は、主に制作年代の推定と図像学的解釈に主眼が置かれてきたが、本研究ではそれとは別の視点、すなわち単独の美術作品や構造物の枠を超えて、広くそれらを取り巻く都市空間、環境にまで考察を広げ、古代末期の都市の成り立ちのダイナミズムを動的な視点で語る方法を試みた。

4. 研究成果

(1) 国内初のオスティア・アンティカ遺跡の関連シンポジウム「古代ローマ遺跡の保存と調査研究の現在」（於：上智大学、2010年11月）の開催にコメンテーター兼コーディネーターとして協力し、来日したオスティア遺跡管轄の考古学者アンジェロ・ペレグリーニ、マルコ・サンジョルジョら、各国の研究者と意見交換を行い、最新の研究成果の知見を深めた。その成果は、同年11月、日本大学文理学部資料館展示会で開催された「古代ローマの港町オスティア」展でも公開され、国内で初めての本格的なオスティア・アンティカ研究の普及に貢献した。

(2) オスティア・アンティカ遺跡の現地調査を継続的に行い、その中でもヨーロッパ地域で唯一と言われる古代ユダヤ教シナゴグ遺跡（1世紀後半～2世紀）に注目しつつ、近年考古学的発見の著しいイスラエルの古代シナゴグ遺跡群（カファルナウム、セフォリス、ハマット・ティベリアス、ベト・アルファ他）の現地調査を行うことで、両者の比較を行った。それによって古代都市計画におけるシナゴグの配置、室内装飾（床モザ

イクと浮彫彫刻）の特徴には一定の共通点も認められることを解明した。従来、イスラエル近郊のシナゴグ群とイタリア、ローマ近郊の遺構は美術史、考古学的視点で比較されることがなかった点で重要である。しかし、類似の意味、その解釈については今後研究を深化させることで、さらに豊かな成果が期待されるだろう。

(3) オスティア遺跡内において、20以上の遺構を数えるミトラ教神殿、ミトラエウムの全作例について、綿密な現地調査を行い、建築および聖堂内装飾のデータベースを作成した。これにより、2～4世紀にかけて都市空間へと拡張していくミトラエウムの配置場所とその内部を飾った豊かな室内装飾のヴァリエーションの実態が明らかになった。同時に4～5世紀にかけて、ミトラエウムを破壊する形で拡大していったキリスト教徒の活動も浮き彫りにされた。

このような小規模な信仰集団のプライベートな活動と、首都ローマの玄関として巨大な港湾設備と神殿などの公共建造物が威容を誇ったオスティアの都市環境を対照的にとらえつつ、港という自然環境と聖所をめぐる有機的関係について考察した。この成果については、2011年11月に京都の立命館で開催された「国際シンポジウム：21世紀の風景表象—風景の構築と自然の認識」で口頭発表を行い、その一部を「風景の形態」『言語文化研究』（以下、5. 参照）において発表した。

(4) 従来の歴史研究では、オスティアは3世紀頃には衰退がはじまったと考えられ、6世紀の歴史家プロコピウスが伝える都市の荒廃した様子から、それ以降は都市の機能をほとんど果たさなくなったと考えられていた。しかし本研究で、初期中世（6世紀～9世紀）の教会堂装飾にも注目していく過程で、都市ローマの教会堂装飾との密接な関係が次第に明らかになった。その成果は2012年7月、早稲田大学での美術史学会例会発表「9世紀ローマの反イコノクラスム、聖遺物崇拝をめぐる教会堂装飾—サンタ・プラッセーデ聖堂のモザイクを中心に」で口頭発表を行った。この内容については、さらに中身を充実させて専門誌への投稿を計画中である。

(5) オスティア・アンティカの美術表現の最終段階としてルネサンス期の受容にまで考察は至った。16世紀初頭の西欧世界では、イスラーム教徒であるトルコ人の侵攻が危惧され、時の教皇ユリウス2世はオスティア・アンティカから派生した町に新たに要塞を築かせた。その要塞建築はラファエロが手

がけたヴァチカン宮殿の壁画「オスティアの戦闘」(1514-1515)にも登場するが、その場面は849年にオスティアの港に上陸したイスラーム教徒に対して、当時の教皇レオ4世が勝利した記念として描かれる。すなわち9世紀のオスティア港でのイスラーム教徒への勝利が、後のルネサンスにいたって絵画化されたことを意味する。ここでは古代建築に深い関心を寄せたラファエロが、オスティア・アンティカ遺跡を同時代的意味のもとで捉えなおし、異教徒に対する防波堤として港の遺構を解釈したことが明らかになった。この成果は2013年3月「墓所に込められた古代への思い—ラファエロの遺言」『美術手帖』に発表された。本論は当初の予定に含まれない研究成果であるが、オスティア・アンティカをめぐる異宗教間の歴史認識を知る一例として興味深い。

以上のような成果から、古代末期から初期中世にかけての港湾都市を美術史・考古学・宗教史を射程に入れて調査・研究するという初期の目的を、比較的順調に実績を積むことができたと自負している。今後はその成果をもとに一層の研究深化に努め、書籍としての出版を計画していきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

- ① 加藤磨珠枝、風景の形態、言語文化研究、査読有、vol. 24(3)、2013、pp. 97-105
- ② 加藤磨珠枝、墓所に込められた古代への思い—ラファエロの遺言、美術手帖、査読無、65巻984号、2013、pp. 82-85
- ③ 加藤磨珠枝、西洋初期中世における教会堂装飾の諸相—美術はなにを語ったのか、キリスト教学、査読有、52号、2010、pp. 193-206

〔学会発表〕(計4件)

- ① 加藤磨珠枝、9世紀ローマの反イコノクラスム、聖遺物崇拜をめぐる教会堂装飾—サンタ・ブラッセーデ聖堂のモザイクを中心に、美術史学会、2012年7月14日、早稲田大学
- ② 加藤磨珠枝、風景の形態について、国際シンポジウム：21世紀の風景表象—風景の構築と自然の認識、2011年11月1日、立命館大学
- ③ 加藤磨珠枝、オスティア・アンティカ遺跡の現状：論題提示、上智大学ソフィア国際シンポジウム：遺跡保存と歴史研究最前線—文化遺産とナショナルリズム、

2010年11月13日、上智大学

- ④ 加藤磨珠枝、西洋初期中世における教会堂装飾の諸相—美術はなにを語ったのか、立教大学キリスト教学会大会、2010年5月29日、立教大学

〔図書〕(計1件)

- ① 加藤磨珠枝、他、中央公論美術出版、ルクス・アルティウム (ローマ・サンタ・マリア・アンティクァ聖堂の再考)、2010、pp. 12-23

6. 研究組織

(1) 研究代表者

加藤 磨珠枝 (KATO MASUE)
立教大学・文学部・准教授
研究者番号：40422521